

轉換した赤軍の防衛戦略

独ソ開戦 極秘の図上演習



集結したソ連のBA装甲車。独ソ開戦開始以前の1枚。

バルバロッサ作戦緒戦において、ドイツ軍の圧倒的攻勢の前になすすべもなく敗退するソ連軍—
そうした認識に再考を迫る事実が明らかとなった。赤軍の防衛戦略の大轉換にメスを入れる。

文=守屋 純

ソ連の対独戦略への誤解

一九四一年六月二十二日に始まるドイツの対ソ攻撃、すなわち「バルバロッサ」作戦は、緒戦の大成功にもかかわらず、わずか一か月で早くも頓挫し、十月からは新たに「台風」^{タイフーン}作戦として衣替えを余儀なくされ、それも十二月にはモスクワ前面でのソ連側の総反撃によって完全な失敗に終わった。

しかし時系列を逆にたどっていくと多くの謎につきあたる。そしてこれらの謎を追求していくと、今まで当たり前のように思われていた「バルバロッサ」作戦のイメージが、実は大きな錯覚あるいは一種の「だまし絵」を見ていたのではないかと、との疑問にたどりつく。

その謎とは、独軍がソ連領内奥深く進撃すればするほど、ソ連は新手の、しかも精銳の兵力を繰り出してきて、ついにはモスクワ前面で最強のシベリア部隊を投入することができたことである。これまでのイメージでは、ソ連側は手持ちの兵力を一切適切に集めて応戦し、それに泥濘と冬將軍も味方して辛うじて独軍の阻止に成功した、ということになっている。ところが、



ではなぜソ連側は最初から国境付近にこれら精鋭部隊を配置して、緒戦で有効な邀撃をしなかったのか、という別の謎が浮上する。実際には、独軍がスモレンスクに到達した七月半ばからソ連側の精鋭部隊による反撃が絶え間なく繰り返され、その大波は十二月のモスクワ前面で最高潮に達する。

もしかすると、独軍関係者が当時もそして戦後もついに気付かなかった、またこれらドイツ側の証言と資料に主として依拠してきた今までの多くの西側の研究でも見逃されてきた、ソ連側の、特にスターリンとジューコフが開戦前に仕掛けていたある大きな罠が存在していたのではないか。だとすれば、ドイツ側はヒトラーも軍首脳もまんまとその罠にはまりこんだのではないかとこの仮説も成り立つ。ここでは、ソ連側が開戦前から「バルバロッサ」作戦にどう対処しようとしていたのかについて、ソ連崩壊後に明らかになった証言と資料から見直してみよう。

ソ連指導部内での戦略論争

戦前のソビエト赤軍の軍事教義はきわめて攻撃的な性格であって、赤軍は

「かならず攻勢的作戦によって敵軍をその領土内で撃滅し、寸土たりともソ連領内に侵入させてはならない」ことを使命としていた。

一九三九年九月、ヒトラーがポーランドを攻撃すると、ソ連側も独ソ不可侵条約秘密議定書の取り決めによってポーランド東部に侵入した。そしてポーランドの完全占領後、独ソ両国はあらためて「独ソ国境友好条約」を締結して正式な分割線を画定、こうして独ソはポーランドにおいて直接、境界を接するようになった。

この時の線引きで、ソ連領土は西に二四〇キロ突き出した「ビヤリストク突出部」を形成することになり、これが将来の対独攻撃の際の前進基地とみなされた。対独戦を担当する西部特別軍管区には多数の戦車・装甲車両が配備され、司令官にスペイン内戦で共和国軍を指揮して一躍有名になった「戦車將軍」ドミトリー・パプロフが任命される。

だがソ連の攻勢戦略は、その直後に勃発したフィンランドとの「冬戦争」において赤軍の内部的欠陥が暴露されるにおよび、重大な見直しを迫られることとなった。さらに、一九四〇年五

月のドイツによる対西方戦のめざましい成功は、ドイツと西側諸国との戦争が長期化し疲弊したところを狙って一挙に対独大攻勢に出る、との目論見をもすべて御破算にしてしまった。つまり当時、対独攻勢どころか、赤軍の全面的な再建が求められる状態だったのである。

この状況からスターリンは一種のパニック状態になったともいわれるが、先のパプロフほか、国防人民委員代理（兵器担当）のグリゴリー・クーリク、そして参謀総長キリル・メレツコフなど、いずれもスターリンへの忠誠だけで出世してきた軍人たちは、相変わらず独裁者の意に沿おうとして、ビヤリストク突出部を堅固に要塞化し、ここから対独攻勢に出るべし、と主張した。

これに対して、ドイツの対西方戦の詳細な研究とソ連の置かれた現状を直視した国防人民委員セミヨン・ティモシェンコと、ノモンハン戦で関東軍を撃退し一躍スターリンに注目されてキエフ軍管区司令官になっていたゲオルギー・ジューコフは、これまでの赤軍の攻勢戦略に重大な疑問を投げかけた。そしてビヤリストク突出部の防衛はソ連にとって負担になり、むしろ旧国境

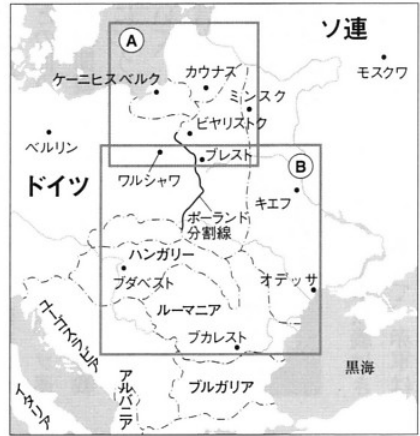
の要塞線（通称スターリン線）を強化すべきであるとした。これはすなわち、ドイツ側に先制攻撃をかけさせてソ連領内に引き込み、その補給線が延びきったところで総反撃に出る、との防御戦略を暗示していた。

実質的には、当時の赤軍の戦略は防衛的なものとなっていたのだが、肅清などによる混乱やスターリン流の恐怖政治などの影響で、はつきりと防御戦略への転換を主張することは、相互不信の空気が充満していた当時のソ連では命取りになることだった。赤軍首脳に対する大粛清の直後であり、密告による告発から身を守るためには、いつもスターリンの顔色をうかがいつ、できるだけ強硬策・積極策を強調せねばならない雰囲気だったのである。

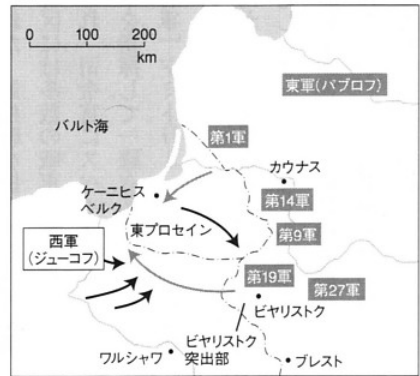
だから表向きの論議の焦点はビヤリストク突出部の扱い如何になった。だがそれは、ソ連の全体戦略をこれまで通りの攻勢にするか、それとも根本から見直して完全に防御にするかという重大な選択を内包していたのである。

クレムリンでの図上演習

一九四〇年十二月、ヒトラーが總統

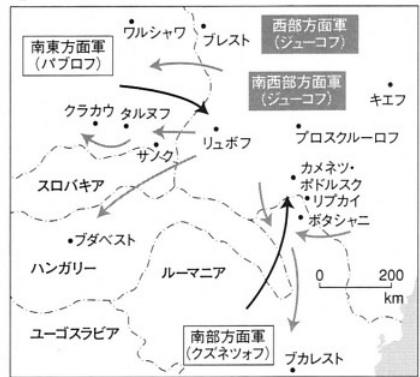


〔A〕第1回図上演習(1941年1月2日~6日)



-----:国境 ■:東軍 □:西軍
 →:東軍の行動 →:西軍の行動

〔B〕第2回図上演習(1941年1月7日~11日)



-----:国境 ■:東軍 □:西軍
 →:東軍の行動 →:西軍の行動

クレムリンでの図上演習は、2回実施された。図Aの第1回目では、ジューコフ指揮の西軍によるソ連侵攻を国境から20km以内で押しとどめたあと、バプロフ指揮の東軍がビヤリストク突出部から一大包囲攻撃を敢行した。だがこの攻撃部隊は西側面を痛打され、同時にビヤリストク突出部北部への攻勢を受けてしまう。一方、図Bの第2回演習では、ジューコフ指揮の東軍が、バプロフ指揮の西軍の侵攻を受けるという状況で行われた。第1回目と違うのは、南部での敵の侵攻が130kmに達し、自国領内部に引き込んだあと、反撃に出ている点である。

指令第二二号によって「バルバロッサ」作戦を発令すると、約一〇日後にはすでにかなり詳細な作戦内容がドイツ空軍省内のスパイ(隠語名コルシカ人)からソ連側に通報され、スターリンの手に届けられた。

ドイツ側の意図を知ったスターリンは赤軍首脳に、ソ連の対独戦略決定のためクレムリンにおいて本格的な図上演習を挙行するよう命じた。そしてそれに自分も出席して検討に加わることにし、前述のすべての軍人たちが召集された。一九四一年の年頭に挙行されたこの図上演習こそ、ある意味、その後の「バルバロッサ」作戦の帰趨を決したとも言える重要性に満ちていた。

この図上演習は一回目が一九四一年一月二〜六日、二回目が一月七〜十一日に挙行された。それぞれ想定を変えて、作戦実施に攻勢論者のバプロフと防衛論者のジューコフを担当させ、演習統裁官にはティモシエンコとメレットコフがあたった。

〔第一回〕

・想定戦力

バプロフ指揮の東軍(ソ連・赤)

五個軍、六四個師団、戦車八八二両、航空機五六五二機

航空機五六五二機

ジューコフ指揮の西軍(ドイツ・青)

六〇個師団、戦車三五一六両、航空機三三三三六機

機三三三三六機

・想定状況

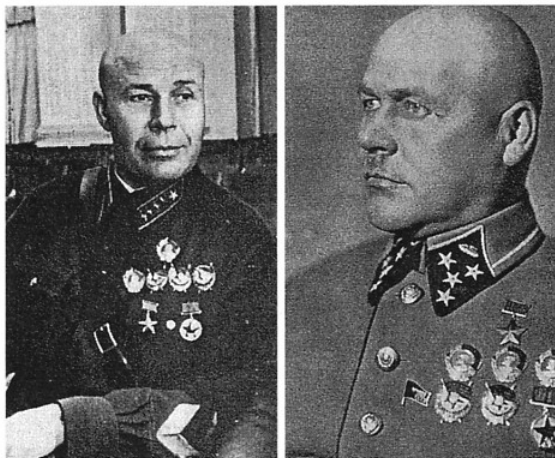
正面距離六五〇キロ。西軍のソ連侵攻によって開戦。国境から一五〜二〇キロ以内で東軍が西軍を阻止。東軍は反撃に転じ東プロイセンへ全面攻勢。

この時、攻勢論者のバプロフは、東軍左翼の機械化部隊による大伸翼運動によって東プロイセン全体を西側から包み込み、マズール湖沼地帯で西軍の包囲を完成させる、という大機動作戦を構想していた。

ところがジューコフは、この機動作戦の主力となる東軍左翼(二個軍と一個機甲集団)の西部側面を掩護する兵力が不足していることを見抜いた。そして東軍を対戦車壕・地雷源・鉄条網などによって防塞化した国境線での戦

関にもつれこませて進撃速度を低下させ、動きの鈍った東軍を砲撃して釘付けにする一方で、西軍の予備兵力を集結して反撃に出た。これと呼応して東プロイセンの最北端の西軍左翼が逆にビヤリストク突出部北側を攻撃して、バプロフの防衛線を強襲することに成功した。

意外な経過に驚いたティモシエンコとメレットコフは即座に演習の中止を命じ、西軍の勝ち、との判定がくだされた。ここではビヤリストク突出部の脆弱性が暴露され、バプロフの持論であり、これまで赤軍の公式教義でもあった攻勢戦略そのものの前提がくずれさつたのである。



防衛論者であるS・ティモシェンコ国防人民委員(左)。彼は、参謀総長ジューコフとともに赤軍の戦略を本格的に防御に転換していく。(右)攻勢論者の一人であるD・パブロフ上級大將は、独ソ開戦後、防衛不備の責任をとって銃殺された。

続いて一月七日から、今度は次のように想定を変えて第二回目の図上演習が挙行され、パブロフとジューコフがそれぞれ役割を交代して担当することになった。

〔第二回〕

・想定戦力

ジューコフ指揮の東軍(ソ連・赤表示) 七個軍、一個機械化騎兵軍、一〇一個師団、砲一万六〇〇〇門、戦車八八〇〇両、航空機五八〇〇機
パブロフ指揮の西軍(ドイツおよび同盟諸国―青表示)

二個方面軍、九個軍、九四個師団、砲八〇〇〇門、戦車五五〇〇両、航空機五八〇〇機

・想定状況

正面距離はキエフ軍管区(開戦後は南西部方面軍)で九〇〇キロ、西部軍管区(開戦後は西部方面軍)で五一〇キロ、オデッサ軍管区で四五〇キロ。西軍は二個方面軍によりシェペトフカ方向を攻め、リュボフ地区での東軍主力の包囲をめざす。東軍はまず敵の攻撃を撃退して適宜総反攻をめざす。

二回目の演習ではドイツのほか、その同盟国であるハンガリーとルーマニアの参戦と、これに対するソ連側の攻勢も前提とされていて、兵力想定もほぼ現実の「バルバロッサ」作戦、あるいはもっと後の一九四四年からのソ連による「バルカン」作戦を先取りしたような内容であった。演習の経過は次のとおりである。

まず西軍の南部方面軍(ドイツの軍集団)

がプロスクルーロフ方向へ向かって六日間で一三〇キロ進出。これに対し東軍はリブカイ・ボタシヤニをめざす敵の側面を攻め、カメネツ・ポドルスク地区で西軍を包囲。ついでジューコフはハンガリーとルーマニアの打倒をめざして最終目標をブダペストとブカレストに設定した総反攻に出た。

その際、ジューコフは東軍を分割してパブロフの背後をクラカウ地区で強打することとし、そのため特別打撃軍に全兵力の三分の一、戦車・機械化部隊の四三パーセントを充て、タルヌフとサノク地区に派遣し、残りの兵力はもっぱら防御にあたりながら敵主力の背後に回り込んで包囲した。ブダペストをめざす特別打撃軍はカルバート山脈で敵南東方面軍の右翼の包囲に成功。ここでもやはり東軍、すなわちソ連側は防御に徹した場合にのみ成功の可能性があることが立証された。

図上演習の結果と影響

この演習の結果がスターリンに与えた影響は決定的だった。メレツコフが両軍の兵力が拮抗していても局地的優位を保持すれば他の静謐地区からの予

備兵力の転用が可能、と弁解してみた説明をしたのに、スターリンは全くのたわごととして激しく斥けた。またパブロフが、地図上の演習では思いがけないこともしばしばおこる、と軽い冗談をとばすと、スターリンは真顔でこれを叱責した。そしてスターリンはある重大な決断をする。

演習終了からわずか三日後の一月十四日、突然ジューコフはスターリンから、「党政治局の決定により」参謀総長に任命された、と告げられる。この人事は意味深長であった。攻勢論者のメレツコフに換えて、防衛論者のジューコフを後任としたことは、同じ防衛論者である国防人民委員ティモシェンコとのコンビが組まれることを意味する。それはすなわちスターリンが、ソ連の戦略全体をそれまでの攻勢から防御に転換させると決断したことを暗示していた。

このスターリンの意を察したティモシェンコとジューコフは、パブロフやクーリク等の攻勢論者には内密に、ソ連全体の戦争準備を防御中心に置き換える作業に着手する。そしてジューコフはソ連の防御戦略をほぼ次のように策定した。

想定状況

独軍はプリピャチ沼沢地帯北方から侵入。ドヴィナ河源流とドニエプル河上流との中間地帯の高地が一種の「陸橋」を形成し、もし敵がモスクワをうかがう場合は必ずここに侵入する。

ソ連側の布陣

防衛のため南北に三重の梯団（エシユロン）を形成。第一梯団は国境防衛のための戦術的梯団。その後方約三〇〇～五〇〇キロに第二梯団を置き、これを敵軍を有効に邀撃するための作戦的梯団とする。さらにその後方の第三梯団は戦略的梯団として、機動性を重視した編成により、モスクワをうかがう敵軍の側面を攻撃する。

ドイツ側が北方・中央・南方の三個の軍集団によって攻撃してくることもソ連側には判っていた。そのためジューコフはドヴィナ・ドニエプル両河東方に配置する。この第二梯団を、反撃のための決定的要素とみなした。それは、ドイツの西方作戦に関する詳細な研究から、先鋒の機甲部隊と後続の歩兵部隊や補給部隊との間に大きな懸隔の生じる可能性があり、その時こそ反撃のチャンスと見たからである。これはほぼスモレンスク到達の時点である。

この時点で第二梯団はドイツ中央軍集団の右側面を衝いてその兵力の一部が南転するのを阻止するとともに、もしもドイツ南方軍集団の攻撃を国境付近で阻止できない場合、この梯団によって内陸で邀撃するとした。すでに「バルバロッサ」作戦開始前に、のちにヒトラーが採ることになる戦略は、この時ほとんど予見されていたのである。

赤軍の戦争準備の混乱

だが、スターリンは決して防衛戦略への転換を公言したわけではなく、表向きの教義と戦略はあくまで攻勢であったから、独軍侵攻の時まで赤軍では戦略とそれに伴う兵力配備をめぐって一貫性を欠く混乱が生じた。

たとえば二～三月にかけて開かれた赤軍最高軍事評議会では、旧国境要塞の兵器を新国境に移設することが決まったが、これはクーリク等攻勢論者の意見であり、ティモシェンコとジューコフはこれに激しく反対した。そこにスターリンが介入し、一種の妥協案として大砲は旧国境地帯に温存し、砲兵と工兵、浮舟架橋隊やトラクター牽引

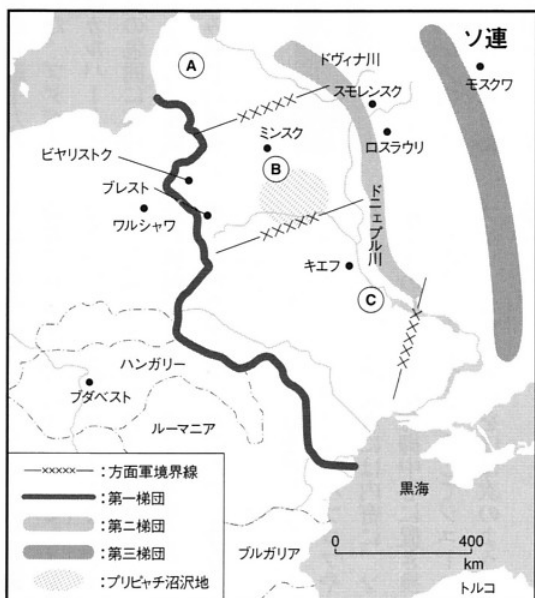
部隊なども「訓練目的」として内陸に配置することになった。開戦時、ソ連側の重砲が国境付近に配置されていなかったのはこのような理由による。

一九四一年五月になると、ドイツ側によるソ連攻撃の情報と兆候はいよいよ顕著になってきた。このため十三日にジュ

ーコフは、内陸の軍管区から部隊の西方移動を下命する。ここで移動したのは、

第22、第21、第19、第16の各軍と第25狙撃軍団であったが、いずれも国境付近ではなく、ほぼスモレンスクからロスラウリに至る線に配置された。しかも一一個狙撃師団は総司令部予備とされてモスクワに集められた。もしこれらの諸部隊がパプロフの麾下に入ったなら、西部方面軍は実に九六個師団の戦力になったはずだ。

だがジューコフは、これら部隊を決



ジューコフの防衛構想

図のように、ジューコフの防衛構想は部隊を3つの梯団に分け、スモレンスク近辺で反撃に出ることであった。実際に展開した各方面軍は(A)北西部方面軍、(B)西部方面軍、(C)南西部方面軍である。

して国境付近には送らなかつた。さらに新式戦車T-34とKV重戦車は一両も国境の軍管区には送られず、これもジューコフが想定した第二梯団のドニエプル・ドヴィナ両河の東岸に配備され、あくまでも反攻の切り札として使用することとされた。

そうとは知らぬパプロフは、たとえ図上演習で持論の欠陥が暴露されても、あくまでスターリンの考えは国境線で

独軍を邀撃し、次に敵地に対する総反攻に出るもの、と思っていた。彼の西部軍管区に割り当てられた兵力は、三個軍・四個機械化軍団。このうち機械化軍団はそれぞれ二個戦車師団から成り、各師団の保有戦車は三七五両にのぼり、これ以外に独立の一個機械化狙撃兵師団が軽戦車二七五両を備えていた。したがってパプロフのもとには二〇〇両以上の戦車・装甲車両がいたことになる。そしてパプロフは、たとえ独軍の攻撃を受けてもただちに内陸から増援の部隊が送られてくる、と思っていた。

だがパプロフの手元にあった戦車はいずれも旧式のBT-7やT-26軽戦車型であって、T-34やKVはまったくなかった。

開戦直前の赤軍

ドイツ側の攻撃準備の兆候がいよいよ高まってきた一九四一年五月から六月にかけて、逆にスターリンは弱気になり、極力対独戦争を先延ばししようとする。この開戦直前のスターリンの意図については、これまで実に多くの説明がなされてきた。

いずれにせよ、現実の「バルバロッサ」作戦当日の一九四一年六月二十二日の時点で、パプロフの西部軍管区には警戒警報も届かず、またパプロフも何の措置も講じていなかった。その理由はスターリンからの「ドイツ側を挑発してはならぬ」とする厳命にある。開戦直前の時期、ドイツ機によるソ連領空侵犯は数百回にのぼり、ソ連側に

よって強制着陸させられた場合もあり、機内から地図とカメラも発見されている。だからドイツ側の意図はソ連側には充分明白で、もしソ連側が開戦当日、つまり六月二十二日午前三時から三時半という決定的なタイミングで警戒・邀撃態勢に入っておけるようにするには、ソ連側からもやはりドイツ領内への航空偵察が欠かせない。



「バルバロッサ」作戦開始当日の早朝、独軍の奇襲攻撃を受け捕虜となったソ連軍兵士。寝込みを襲われて下着姿のまま捕まった者もいた。独軍は西部方面軍を約10日で崩壊させることに成功した。

しかしドイツ側がしたのと同じ頻度で偵察を実施すればドイツ側を刺激することはさげられない。また地上部隊への警戒態勢発令や内陸からの動員もドイツ側諜報によって察知される恐れがある。事実、ドイツ側は事前の諜報で、ソ連側が国境の各軍管区への内陸からの増援を行っていないことをつかみ、国境突破は可能と判断していた。

おそらく以上のような理由から、ドイツ側の作戦の中心となる中

央軍集団による強打を受け止めるべき任務にあったパプロフの西部軍管区は、開戦の時点で何の準備もない状態で、「寝込みを襲われた」わけである。

「バルバロッサ」開始

そうするとスターリンやジューコフの防衛戦略の中でパプロフに期待されていた本当の使命とは、侵入してくる独軍を撃退して反撃に出ることではなく、できるだけ国境付近で独軍をくい止め、内陸への進撃の速度を鈍らせることになったといえる。その場合、たとえ包囲されても一種の泡のように固まったまま東方へと移動しつつ、前進しようとする独軍を背後から脅威すればよかった。

ところが実際にはパプロフは開戦当日のドイツ空軍の奇襲ですっかりパニック状態におちいって満足な指揮も執れない有様となり、参謀長が応急の指揮を執る始末だった。正面のソ連西部方面軍がこのようであれば、開戦当日に制空権確保に成功したドイツ側、特に最先鋒のグデーリアンとホートの両機甲集団の進撃が好調であったのは当然である。そしてほとんど一日間で



スモレンスク近郊で戦闘中の独軍（上）と、ミンスクーモスクワ街道を行く独中央軍集団の部隊（下）。ジュエコフの防御戦略は、スモレンスク到達時点を反撃の時期とし、そのための第二梯団をドヴィナ・ドニエプル両河東岸に配置するというものだった。実際にはスモレンスクも突破されたが、のちのバルバロッサ作戦の推移からして、ソ連軍の戦略が防御に転換していたことを読み取ることができる。

といつて、パブロフが単に哀れな犠牲者だったと言ふこともできない。パブロフとは違い、たと

えば開戦当日のキエフ軍管区では司令官ミハイル・キルポノスが数日前からドイツ側のただならぬ動きに注目し、内務人民委員部の国境監視隊と密接な連絡をとりながら、

独断で国境付近の各部隊を警戒態勢に置いていたのである。そのため、ソ

連側で最大の兵力が集中していたこともあって、侵入してきたルトシユテ

ット指揮のドイツ南方軍集団に対して有効な反撃が可能になった。そして、このキルポノスの判断と奮戦は、やがてドイツ側の「バルバロッサ」作戦全体に大きな変更を迫るほどの効果を引き起こすのである。

では本当のところは？

こうして概観してみると、十二月初めのモスクワ前面でのソ連側の総反攻は、決して冬将軍と泥濘に助けられて

成功した、その場しのぎの応急策だったわけではなく、すでに開戦前からソ連側によって仕組まれていた防御戦略の発動だったことがわかる。

しかしドイツのゲデーリアンは、戦後の回顧録を見る限り、ジュエコフによる大いなる罠に嵌ったことに気付いていない。それどころか、キエフ作戦のために中央軍集団を一か月足止めしたことが失敗の最大の原因だったとしてヒトラーの責任だ、と述べている。

これに対して参謀総長のハルターは、ドイツ側が何か大きな見落としをしたまま対ソ戦を始めてしまったらしいことに気付いている。開戦五日目の八月十一日の日誌に、ハルターは次のように記している。

「すべての局面でいよいよ明らかになってきたことは、巨人ロシアが全体主義国家特有の呵責かたどなさをもって明確に戦争準備をしていたことを我が方は見くびっていたことである。このことはとりわけ純軍事の面にあてはまる。

我が方は開戦時、敵を二〇〇個師団と算定していたが、これまでにすでに三六〇個が確認されている。……ロシア側はたとえ一ダースが撃滅されても新

西部方面軍は壊滅して白ロシアの首都ミンスクも呆気なく陥落し、「ほぼ予定通りに」ドイツ側はスモレンスクまで到達することができた。

このあまりにひどい緒戦での失敗のため、パブロフはその一命をもって責任をとらされることになるが、単なる作戦上のミスでは方面軍司令官の銃殺にはあたらない。そこでパブロフは「戦前からずっと反ソ陰謀グループに属してドイツと通謀していた」と自白させられ、開戦から一か月後の七月二十二日に銃殺された。従来この出来事は、もっぱらスターリン流恐怖政治の典型

的な現象の一つとされてきた。

だが、同じく独軍の突破を許してしまった沿バルト軍管区（開戦後は北西部方面軍）司令官フォードル・クズネツォフは、解任はされたが、その後も各地の司令官を務め、スターリン死後まで生き延びている。すると、スターリンがパブロフに無理矢理「敵のスパイ」とのひどい罪状を押しつけてまで処刑しなければならなかったのは、彼が自分の「本当の使命」をよく理解せず、予定よりずっと早く独軍の突破を許してしまったことへの激怒だったといえよう。

戦力源が近く時間をかせげるが、我方は戦力源からほとんど遠のくばかり大変な広さのなかで各部隊は互いに引き離され、充分な縦深もなまま繰り返す敵の攻撃に晒されている。領域が広大なために間隙が広がり、局部的な成果しか挙げられない

だがハルデーは戦後になると、「バルバロッサ」失敗の原因という点では、キエフ攻略にこだわったヒトラーの決断にあり、と断定してしまう。ハルデーとゲーリアンはずつと対立的な関係にあったが、作戦失敗の原因については、期せずして二人ともヒトラーを最大の責任者としている。

この全く対立する立場の関係者から同じ結論がだされたため、戦後の西側諸国での「バルバロッサ」作戦イメージはもっぱら「ヒトラーの過ち」とか「独軍の失敗」という具合に、少なくともあくまでドイツ側を主語とした見方がなされてきた。しかし、もし戦前からソ連側が仕掛けていた防御戦略にドイツ側が嵌った、というのが真実であったとすれば、「バルバロッサ」作戦のイメージそのものはソ連側を主語としたものに変わらざるを得なくなるだろう。

捨て石、パプロフの本当の悲劇

結局、パプロフはスターリンとジューコフの防御戦略の捨て石にされたといえよう。スターリン死後、粛清された赤軍軍人の罪状の洗い直しが行われ、パプロフについては「西部軍管区の戦闘準備態勢に多くの欠陥があった」とは否定できない

が、軍の指揮系統をわざと混乱させ戦わずして敵に武器を引き渡した、との有罪判決には根拠がない」として名誉回復された。だがパプロフが本人も知らぬところで行われていた、より大きな赤軍戦略転換の犠牲になったことにはまったく触れられていない。そればかりか、テイモシエン

もジューコフも



緒戦で捕虜となったソ連兵。投入する部隊を撃破されながらも、兵力をかき集めて辛うじて勝利した、とされる「バルバロッサ」作戦時のソ連軍は、実際には防御へ戦略を変更させていた。その意味でソ連の最終勝利は必然であったといえる。

終生この件には沈黙を守り通した。その理由はおそらく、冷酷というにはあまりにも冷酷な計算のために、むざむざ戦友を犠牲にしてしまったことに気がとがめたこと。さらに、もしソ連側が独軍による攻撃を事前に察知して、周到な防御戦略を構築していたとすると、「ファシスト・ドイツの侵略の犠牲

者」とするこれまでのソ連の立場が崩れてしまうのを恐れたからではないだろうか。

パプロフによく似た例として、一九四一年十二月七日朝、パールハーバーで日本海軍の奇襲に有効な対処ができず解任された米太平洋艦隊司令長官ハズバンド・キンメルの場合が挙げられよう。キンメルは戦後の名誉回復裁判で、開戦当日に何の警報も受けていなかったことを強調した。そしてアメリカの「真珠湾攻撃謀略」論者は、キンメルと太平洋艦隊が大戦略の捨て石にされたとして、大統領ルーズヴェルトを非難している。

しかし、パプロフはあくまでスターリンと赤軍の攻勢戦略を信じたまま敗戦の責任をとらされ、「ドイツの手先」とのひどい罪状までつけられて銃殺された。だからパプロフは二重の意味で犠牲者であった。すなわちそれは単に敗北の責任をとらされて処刑されたというだけではなく、パプロフが独裁者スターリンの意向に沿って行動した（と考え違いをした）ことが、実は大きな「罪状」に相当するということ、パラドックスに気付かないまま死んでいったということなのである。